

ハーバーマス方法論における解釈学的アプローチ

The Hermeneutic Approach in Habermas' Methodology

文学研究科社会学専攻博士後期課程在学

武 田 朋 久

Tomohisa Takeda

はじめに

周知の通り、ハーバーマス (Habermas, J.) は1981年に『コミュニケーション的行為の理論』を世に問うた。そこにおいて展開されている主題は、第一には、従来の理性概念が認知的・道具的理性へと狭小化されていることへの反駁とその打開策としてコミュニケーション的合理性の問題であり、第二には従来の社会学理論が、パーソンズ (Parsons, T.) に代表される機能主義的システムモデルを中心として社会に関する概念を構成していたことに対して、象徴連関という意味理解の対象領域を不当に閉却する、若しくは最小化されることのない社会の概念即ち生活世界とシステムという二層の社会概念の問題であり、最後には、近代をニヒリズムに陥ることなく、その潜勢力を開示する「未完のプロジェクト」として把握する近代化に関する問題である。

ハーバーマスはこの彼の主著を、彼自身が述べるように、四年の歳月を要して完成させたのであり、「コミュニケーション的行為」の理論という行為を中心として展開されるのであるが、その内容は上記に示したごとく社会学理論及び近代社会全体に関する包括的な問題に対する全体的な言及となっている。「T. パーソンズが1937年の『社会的行為の構造』のなかで展開してみせたような、理論史的再構成と概念分析とが結びついている行為の理論が、確かにわたしにはひとつのモデルとなった」¹⁾とハーバーマスが述べるように、彼において社会学理論とは、コミュニケーションという相互行為を中心として描き出されるものであり、それはパーソンズやウェーバー (Weber, M.) の行為理論がその前提として受容されていることを意味している。

この彼の主著は、1970年の『社会科学の論理によせて』において、既にその構想が提出されていた。この著作において、ハーバーマスは「社会的行為の一般理論はいかにして可能か」²⁾という問題関心に導かれ既存の行為理論を検討し、人間の行為に関する水準において、行動主義は実証主義的な観察によって意味の領域をその理論化の対象から排除しているために、合理的選択理論のような規範的・分析的アプローチは理論内において既に意味が確定されているために、また機能主義的アプローチにおいては、行為過程においてその都度参照されるというよりも、最初に確定された意味に従って行為

が遂行されるというモデルによって、意味及び意味理解の領域が最小化されているためにそれぞれ問題があるとされる。

ここで、ハーバースは社会学理論が、より十全な理論として人間の行為一般を理論化しようと試みるならば、既存の行為理論のアプローチを補完するために、実証主義的に硬直化された方法論だけではなく、理解社会学を充実する方途を求めべきであると主張する。

ここにおいてハーバースは、現象学的アプローチ、言語論的アプローチ及び解釈学的アプローチを検討する。『社会科学の論理によせて』におけるハーバースの論述は、意味理解の問題に関して、それら三つのアプローチをそれぞれ別個に検討するのではなく、上記の順序で重層的に前者の補完を後者が行うという形式を取っている。

現象学的アプローチにおいては、意味理解の領域を主題的に問題化しているものの、その「間主観性」(Intersubjektivität)は、尚、認識主体の主観性の契機として与えられており、他者との相互行為における調整メカニズムとして、行為における偶有性を克服することができていない。

それを克服するのが、後期ウィトゲンシュタイン(Wittgenstein, L)の「言語ゲーム」(Sprachspiel)という概念であり、間主観性を言語ゲームという言語のネットワークのなかで捉えるならば、私的言語の存立が不可能であるということから、コミュニケーション的に変容された間主観性という新たな概念形成を獲得できる。しかし、この言語ゲームという観点は、「言語において人間は一致するのだ。それは意見の一致ではなく、生活形式の一致なのである」³⁾という条件のもと、同一の社会的な生活世界に属する諸主体間の一致については説明が可能であるが、異なる社会的な生活世界に属する主体間における一致を理論化するために、メタ言語を導入せねばならないとハーバースは結論づける。

ここにおいて、既に述べたように、ハーバースは解釈学的アプローチを検討するのであるが、それによって意味理解の問題領域において現象学的アプローチと言語論的アプローチの短所を社会的行為の一般理論のために補完するのである。

よって、本稿においてはハーバース方法論における解釈学の批判的摂取を考察することにより、『コミュニケーション的行為の理論』へ至る理論的発展の過程を追跡すると共に、その妥当性を検討することを目的としている。

・言語分析から解釈学へ

後期ウィトゲンシュタインの言語ゲームという考えから、社会的相互行為における間主観性の問題へ「言語論的転回」をもたらし、ひいては「コミュニケーション論的転回」へと至る端緒を獲得したハーバースは、多様な言語ゲーム間の調整が、メタ言語ゲームの要請につながることを指摘した⁴⁾。

しかし、この多様な言語ゲーム間を調整するメタ言語ゲームという関係は、対象言語に対するメタ言語の関係を導き、その説明の根拠をメタ言語に求める場合には、無限遡行を引き起こすことになる。

しかも、そのメタ言語の要請というのは、社会学理論の水準においては理論的仮象であり、対象言語を説明するメタ言語の文法規則もまたそれらの間の関係を成り立たせている文法規則も、日常言語の文法規則に含まれているのである。つまり、最終的なメタ言語とは、日常言語でしかありえないのである。「すべての日常言語の文法というのは、すでにそれ自身、その文法によって確定された言語を超越する可能性をも、すなわち他の言語への翻訳、また他の言語からの翻訳をおこなう可能性をも具備しているのである」⁵⁾。

ここにおいて、ハーバーマスは、「翻訳という概念はそれ自体弁証法的な概念である」⁶⁾と考えている。つまり、対象言語とメタ言語の関係は、演繹的な規則によって成立しているのであるが、ここでハーバーマスが着目する「翻訳」という行為は、異なる言語間にあつて、演繹的には導くことができないけれども、ある共通する事態について言い換えて表現することが可能であるような行為を指している。つまり、多様な言語ゲーム間の調整を理論的に上下的な構造による説明ではなく、水平的な構造として表現しようとするような方途がここにあると考えているのである。「翻訳というのはある言語を用いて、その言語で文字通りに表現されるわけではないが、それにもかかわらず<言い換えて>表現し直しようとする事態を、表現するのである。H. G. ガダマーは解釈学の基礎にあるこのような経験を、解釈学的経験と呼んでいる」⁷⁾。

この理論的に水平的な説明の構造によって、メタ理論に頼ることなく社会的な生活世界間の調整の可能性をハーバーマスは指摘するのであるが、その場合に着目するのが、ガダマー（Gadamer, H-G.）に代表される哲学的解釈学のアプローチである。

そして、この翻訳に関して、理解社会学を基礎づけるという観点から、ウィトゲンシュタインに代表される言語論的アプローチの限界が示され、解釈学的アプローチの必要性が説かれるのである。

ハーバーマスによれば、解釈学との対比において、後期ウィトゲンシュタインの見解に問題があるのは、以下のような点である。

まず第一に、行為し発話する主体と文法規則の関係において、同一の言語ゲーム内で活動する諸主体は、文法規則に則ることによって、互いの相互了解並びに行為調整が実現されている。しかし、言語ゲームという概念設定によって、諸主体間の相互了解と行為調整が、偶有性をはらむことなく説明可能となったが、このことは、諸主体間の直接的なコミュニケーションによって、調和が保たれるというよりも、諸主体ごとに内面化された言語ゲーム規則を追遂することによって、秩序が成立していると考えられる。つまり、言語ゲームに編み込まれた諸主体は、限られた能動性しか与えられておらず、言語ゲーム規則の外側へ踏み出る可能性も制限されている。

しかし、「解釈学的自己反省は、後期ウィトゲンシュタインによって示された言語分析の社会言語学的段階を乗り越える」⁸⁾とハーバーマスが述べる場合に、上述の点について二つの意味を有している。言語ゲーム規則の内面化は、その言語実践において、一義的に固定化された適用によって成立しているのではなく、状況ごとに異なる適用とそれを解釈し、新たに適用していく解釈学的状況を呈してい

るのであり、さらには、共時的水平的な次元においてのみではなく、通時的な世代間、時代間においても適用と解釈が循環的に発生しているのである。つまり、ウィトゲンシュタインの言語ゲームにおいては、言語実践における主体の能動性と歴史性が、限られた範囲でのみ考察の対象となっていたのであり、ガダマーにおいてはそれが克服されているとハーバーマスには考えられているのである。「文法的諸規則はそれらのありうべき適用と解釈の必要性を内包している。この点をウィトゲンシュタインは洞察しなかった。それ故、彼は言語ゲームの実践を非歴史的に把握したのである。ガダマーにおいて、言語は第三の次元を獲得する。即ち、文法が諸規則の適用を規制し、逆にその適用は、諸規則の体系を歴史的に発展せしめるのである」⁹⁾。

第二に、ハーバーマスは、上述の問題とも関連するのだが、ウィトゲンシュタインの言語ゲームにおける理論化以前の問題として、「理想言語の放棄にもかかわらず、言語ゲームという考えは、形式化された言語という隠されたモデルに依然として執着している」¹⁰⁾と考えている。言語ゲームにおいて、ウィトゲンシュタインが想定しているのは、言語ゲーム内に存在する諸主体に対して、文法規則が一律に同じ影響を与えている状況であり、形式言語への企図を放棄したかに見えて、尚、ウィトゲンシュタインにおいては、日常言語の多様性それ自体から理論化を出発させるのではなく、暗々裡に、その原理となるような形式言語を理論化の端緒としているのである。

しかし、言語構造における意味の同一性を保つこととある状況下に諸主体間の同一性が維持されることは同じではない。諸主体間において同一の意味が成立する状況と諸主体間が一致することは別次元のことである。認識主体が自己を自己として確認できるのは、実は他者との相異という契機からであって、他者との同質性からではない。これによって、ハーバーマスは、言語論的アプローチを補完するために、解釈学の導入が不可避であると考え。つまり、日常言語の多様性をそのままに、その説明のためのメタ理論を想定することなく、諸主体間の行為調整を行いうるアプローチは解釈学に求められるのである。「解釈学的理解は、隔たりを保ちつつそれを架橋し、コミュニケーションが断絶することを防止する」¹¹⁾。

・ハーバーマスによる哲学的解釈学の受容

ハーバーマスが、妥当な社会的行為の一般理論が可能となるために必要な理解社会学を基礎づけるという観点から、解釈学を評価した場合、理論的に二つの点が重要であると考えている。

第一には、ガダマーの「哲学的解釈学」における重要な概念である「地平の融合」(Horizontverschmelzung)に関して、コミュニケーション的行為主体を中心として構成される諸地平の交錯という状況は、開放系を成しており、理論化に際して、日常言語の多様性に劣ることのない、絶えざる更新の可能性を有している点である。「ガダマーにとっては、解釈学的な相互理解は諸地平の融合というイメージにおいて表現される」¹²⁾。

地平の融合という解釈学的理解の状況は、共時的な方向に向けて地理的文化的言語的に隔たりのある地平に対して、相互了解の可能性へ開かれていると同時に、世代間、時代間という通時的な方向即ち歴史的な地平へ向けても過去から未来へ至る伝統連関の契機として、相互了解の連鎖に編み込まれている。つまり、「われわれはある言語ゲームを、われわれがすでに精通している言語の地平から理解するようになる」¹³⁾という説明は、言語ゲーム間の相互了解が日常言語の水準で可能となると同時に、言語ゲームにおける没時間性に歴史過程を組み込むことが可能となることを意味するのである。

そういった日常言語による間主観性に基礎づけられた解釈主体は、その能動性を制限されることなく、歴史への主体的な参加者として現れることとなる。この点に関連して、第二の重要な点が立ち現れる。

「解釈学的自己反省の視点から見れば、理解社会学の現象学的基礎づけや言語論的基礎づけは、歴史主義と同列のものとなる。歴史主義と同様に、それらは客観主義に帰着する」¹⁴⁾という、伝統を担い伝承する解釈者という視点は、コミュニケーションの水準において、歴史に対して超越的な態度を取ることのない主体的な参加者となることを意味し、客観主義化を克服することが可能となる。

社会的行為に関する理論において、客観主義が問題となるのは、合理的選択理論などの場合には、理解の対象を観察するにあたって、観察のための基準を理論的に設定することによって超越的な観察者の視点を確保するという規範主義的な傾向を導入せざるを得なくなる。また、機能主義にあっては、規範主義を導入することはないが、ホメオスタシスなどの前提によるシステムの均衡状態をその観察基準とすることができ、それにより観察者の視点を確保することが可能となる。しかし、観察者の視点はあくまでも観察者の視点から被観察対象と結びつけられるのであり、客体それ自体の構成と必然的に結びつくかどうかは理論以前の問題として依然残ったままである。つまり、客観化的手法を採用することは、理論化の過程において、自らアポリアを作り出し且つ内包することとなる。

また、理解社会学においても、客体への接近を観察者の態度によって行うことは、それが主観哲学に立脚する限り偶有性を保留するか、神秘主義を採用するかのいずれかに陥ることとなる。

解釈学的アプローチを採用する場合に、この問題は解決される。コミュニケーションの水準において、解釈学的反省は観察者に解釈学的状況における理解を要請し、観察者は内的な連関によって必然的に対象と結びつくことができるのである。

彼ら〔現象学的観察者や言語分析者 - 筆者〕は、コミュニケーションの経験を通じてのみ彼らの客体と結びつけられているのであり、それゆえもはや非参加者の役割を自負することはできない。再帰的参加者のみが、すなわち解釈学的理解の切り離しがたい反響板としての初発状況の統制のみが、即事性を保証する¹⁵⁾。

つまり、ハーバーマスにおいて解釈学的アプローチを採用することの最大の利点は、実証主義に代表される客観主義を回避することが可能となる点である。

ハーバーマスは、言語ゲームという考えをガダマーにおける地平という概念で捉え直すことによって、ハーバーマスが企図しているコミュニケーション的水準における社会的行為の理論化の方途への重要な契機を発見している。つまり、言語ゲーム内において行為する主体に、解釈学的理解の契機を賦与することにより、間主観性に立脚する行為主体の内的視座を獲得すると同時に、彼の存在している言語ゲームを通時的共時的に構造化することが可能となったのである。「解釈学的理解を理論に帰したり、あるいは経験に帰したりすることは無意味である。それは両者であり、かついずれでもない。われわれがコミュニケーション的経験と呼んできた経験は、通常、その文法が世界把握の諸図式の結びつきを確定するところのある言語の内部で生じるのである」¹⁶⁾。

・ハーバーマスによるガダマー批判

既に述べたようにハーバーマスは、後期ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論を基盤とする言語論的アプローチによる理解社会学の基礎づけを、ガダマーの哲学的解釈学で補うことによってコミュニケーション的行為の理論への糸口をつかんだのであるが、同時にその限界をも把捉している。

ハーバーマスは、言語ゲームに歴史的な時間性を与えるモデルを解釈学的アプローチによって獲得したのであるが、同時に解釈学的理解を行う主体における伝統の拘束性を問題とする。ハーバーマスによれば、ガダマーの想定する解釈学的主体は、伝統のなかで解釈学的理解を行うことによって、自己の属している伝統を更新する能力を与えられてはいるものの、伝統の有する権威は、ある行為者に対して強力な拘束として現れる可能性を否定できない。そして、その拘束性が行為者にむけて影響を及ぼした場合に、その行為者は能動性を失い歴史に埋没する主体となってしまう。

ハーバーマスは、「ガダマーは、理解における先入見の構造への洞察を、先入見 (Vorurteil) そのものの復権へと転化させる。けれども、解釈学的予握 (Vorgriff) というものが不可避であるという事実から、正統な先入見というものが存在するのだということがはたして直ちに導き出されるであろうか」¹⁷⁾ と考える。すなわち、ある行為主体への伝統の拘束が、そのまま正統なものとして受け容れることが可能であるか、またそれが受け容れられた場合に、ある行為者はその正統性をどのように検証し、反駁の可能性を保持することができるのか、と考えるのである。

この問題は、行為主体の側面を考察する場合に、その行為主体の認識は、事実性として現れる伝統的権威に拘束されている。しかし、行為主体の理解の先行構造として与えられる伝統的権威は、その受容の初期には盲目的な服従を可能とするが、その行為主体が事実性に対する洞察を行うならば、すなわち反省を行うならば、事実性はその伝統的権威をいう覆いを剥ぎ取られることとなる。つまり、「権威と認識とは収斂しない」¹⁸⁾ のであり、「ガダマーは理解のなかで発展する反省の力というものを正しく評価していない」¹⁹⁾ とハーバーマスにおいて結論されるのである。

ハーバーマスにおいて、理解の先行構造として行為主体に与えられる伝統的権威は、反省という過

程を経ることがなければ、暗黙的明示的を問わず、そのまま行為主体に対する支配の構造へと変容していく契機を有するものである。よって、ハーバーマスは彼の想定するコミュニケーション的水準において、行為主体の反省を梃子として、合理的な合意を達成することを考えるのである。「言語ゲームの文法を世界把握及び行為の規則としてドグマ的に教え込んできた権威的な道程が反省的に想起されることによって、権威からたんなる支配的なものにすぎなかった要素が剥ぎ取られ、洞察と合理的決定というより暴力的ではない強制へと解消されうるのである」²⁰⁾。

これによって、ハーバーマスは日常言語と伝統によって間主観的に構造化された言語ゲームの中で活動するコミュニケーション的主体が、その構造に埋没する方途を模索しているのである。

何故ならば、日常言語による構造化によって、メタ言語及びそれを採用するメタ理論を否定することによって成立した構造の内部に包含されているコミュニケーション的主体は、伝統として与えられる言語の外側に立つことは原則的に不可能であり、「客観精神の水準において、言語は偶発的な絶対者になる」²¹⁾のである。つまり、意識的無意識的によらず、絶えずコミュニケーション的行為者は、言語の拘束を受けるのである。

言語をあらゆる社会制度が依存している一種のメタ制度として把握することは十分に意味のあることではある。なぜなら、社会的行為は日常言語によるコミュニケーションのなかでのみ構成されるからである。しかし、このような伝統としての言語というメタ制度は、明らかに、それはそれで規範的連関へは還元しえないような社会的諸過程に依存しているのである。言語はまた支配と社会的権力の媒体でもあるのだ。それは組織された暴力関係を正統化することに役立つ。正統化というものが、みずからがその制度化を可能にしている暴力関係をはっきり言い表すものでないかぎり、すなわち、暴力関係が正統化のなかでたんに表出されているに過ぎないかぎり、言語はイデオロギー的なものでもある。この場合、問題となっているのはある言語を用いた欺瞞ではなく、言語そのものに伴う欺瞞である。解釈学的経験は、このように象徴連関が事象的諸関係に依存していることを看取することによって、イデオロギー批判へと移行するのである²²⁾。(傍点筆者)

ハーバーマスはここにおいて、ガダマーの哲学的解釈学に対して批判を行うのである。ハーバーマスは、行為者に対して事実として成立していることと、行為者が本来ありうべきかたちで存在する仕方を区別する。すなわち、社会的行為におけるシステムの歪曲されたコミュニケーションを告発するのである²³⁾。ハーバーマスは、権威や伝統といったかたちで成立している事実性には、構造的暴力や支配といった要素が含まれており、ガダマーの学説に従うならば、暴力関係を再生産する過程に陥らざるをえないと考える。

社会的行為の客観的連関は、間主観的に思念される意味、象徴によって伝承されるような意味の次元に還元し尽くされるものではない。 中略 社会的行為は客観的連関からのみ把握しうるのであるが、その客観的連

関は、言語、労働および支配からともに構成されているのである²⁴⁾。

故にハーバーマスは、ガダマーを代表とする解釈学的アプローチを乗り越えるために、解釈学的経験を透徹することによって、「イデオロギー批判」を遂行する必要性を説くのである。

．ガダマーの立場

ハーバーマスは、コミュニケーション的水準における社会的行為の一般理論を模索するために、理解社会学を解釈学的アプローチによって補完しようと試みたのであるが、同時にそれはガダマーの哲学的解釈学への批判となっている。これを含むのが、ハーバーマスやアーペル (Apel, K-O.) とガダマー等々が論争を繰り広げたいわゆる「解釈学論争」である。ハーバーマスのガダマーに対する批判は既に述べたとおりであるが、ハーバーマスの指摘する解釈学の短所は、ガダマーの考えにあって真に短所となりうるのであろうか。

ガダマーは、彼の主著『真理と方法』の第2版序文において、1960年、最初に『真理と方法』を世に問うた後の反響を考慮に入れながら、自己の立場を更に明確にしている。

ガダマーの『真理と方法』における目的は初版の序文において、「理解という現象は、人間が世界にもつ関連すべてに見られるばかりではない。それは、学問内部においても独立した妥当性を持ち、一種の科学の方法に読みかえようとする試みには抵抗する。以下の論究は、近代科学内部において、科学的方法論の普遍性要求に対して異を唱える、そのような抵抗に結びついている」²⁵⁾ (傍点筆者) と述べられ、一瞥したところ、理解をその方法原理とする精神科学と説明をその方法原理とする自然科学の両者について、論究していると思われる。またそれに続いて、近代科学が成立して以降支配的となっている「科学的方法の支配領域を越えたところにある真理が経験できる場をあまねく求め、さらにその経験独自の正当性を質すところ」²⁶⁾ にその目的があると述べ、表面的には、実証主義的手法が成立して以来論争の絶えない科学における、統一科学という思考と二元的科学という思考の両者を調停するために解釈学的基盤において科学を統一しようとする試みと見られることもある。

しかし、ガダマーの意図は別にあり、『真理と方法』の内容からも見て取ることができるが、第2版の序文において自らの「哲学的解釈学」の端緒を、カント (Kant, I.) の『純粹理性批判』における問題関心になぞらえ、それを存在論的に展開している点に求めていることが述べられている。つまり、ガダマーの哲学的解釈学のモチーフは「近代自然科学にとっての限界がどこにあるかではなく、そうした自然科学に先行しており、むしろそれを可能にしているものがなんであるかを明らかにし、意識化する」²⁷⁾ ことにあり、それは同時に「解釈学的普遍主義」の主張でもある。

哲学的解釈学は、端的に述べれば、従来の解釈学の系譜すなわちテキストを解釈する技術としての解釈学とは質的にまったく異なり、人間の存在形式一般の学を意味しており、これはハイデガー (Heidegger, M.) の『存在と時間』から影響を受けたガダマーがそれを継承したものである。「私は『解

釈学』という概念を、若いハイデガーが使った意味で用い続けたのである。それも方法論の意味ではなく、現実的な経験の理論としてである」²⁸⁾。

ここにおいてガダマーの哲学的解釈学が対象とするのは、極言すれば「現存在」(Dasein)であることがわかる。ガダマーは、哲学的解釈学という概念を次のように定義している。

この概念は、現存在の根本動態、すなわち現存在の有限性と歴史性を為すところの根本動態を言い表している。それゆえにまた現存在の世界経験の全体を包括しているのである。理解という運動が包括的かつ普遍的なものであるとしたのは、自分勝手な考えでもなければ、ある一面的な見方を強引に拡大したものでなく、むしろ事柄の本性に由来しているのである²⁹⁾。

ガダマーの哲学的解釈学は、「人間の世界経験と生活実践の全体に向けられている」³⁰⁾のであり、それは「主観性によるいっさいの理解行為に先行する問い」³¹⁾として定式化可能である。つまり、人間の生それ自体とも言う人間の存在論的認識形式一般を考究の対象としているのであり、ここに「科学的方法論の普遍性要求」に対抗する「解釈学の普遍性要求」の根拠が成り立つのである。「ふたつの世界 [テクストの元来の世界と後世 - 筆者註] を包括しているものこそ普遍的な解釈学的宇宙なのである。解釈学的アスペクトの普遍性は他の連関にも認められるのであって、それを手前勝手に狭めたり、切り捨てたりすることはできない」³²⁾。

解釈学的アスペクトの普遍性においては、ある主体が取捨選択したり、態度表明を行ったりするといった主体と対象の関係の在り方を問うのではなく、人間が存在するが故に必然的にひき起こる「理解」(Verstehen) という形式を扱うが故に、哲学的解釈学はそれを主張することができるのである。そして、「適用とは理解そのものの一契機である」³³⁾とガダマーが述べるように、理解とは「解釈」と「適用」を含む動態的な流れであり、過去の地平 (Horizont) と現在の地平が理解によって媒介され、影響作用史 (Wirkungsgeschichte) を形づくっていくこととなる。

あらゆる理解の様態に共通しているものがなんであるかを探り出すことであり、それによって、理解というのはなんらかの与えられた「対象」なるものに対して主体の取る態度などでは決してなく、影響作用史に属するものである、つまり理解される当のものの存在に属するものであるということを示すことにあった³⁴⁾。

また、ガダマーの考えでは伝統と影響作用史の関連は「影響作用史的契機はいっさいの伝統理解のうちに働いており、かつ働き続けているということである」³⁵⁾と定式化され、解釈学的主体の動態性はそのまま過去と未来を含む歴史的な地平へと拡大されていくのである。しかし、ここで伝統は解釈学的主体にとって無批判に受容されるものではなく、解釈学的反省の対象として考えられており、そこにこそ解釈学的な動態性が保証される根拠があるとガダマーは説明する。「解釈学的意識というも

のは、ある特定の歴史的条件のもとでのみ存在するのである。伝統はその本質からして、伝統として伝えられているものを当然のこととして次の時代に伝えてゆこうとするが、伝統の獲得という解釈学的課題についての明確な意識が形成されるためには、そうした伝統そのものが疑わしいものとなっていなければならない」(傍点筆者)³⁶⁾。

そして、客観主義や相対主義といった自然科学的方法ではなく、解釈学的主体として歴史的伝統へ接近するならば、最後の歴史家たらんとする立場をとることなく、つまり歴史全体を見渡すことのできる絶対者の立場に陥ることなく、歴史における解釈学的循環を行えるのであり、またそのような態度こそが歴史的伝統を「自己の存在の作用契機として考える」³⁷⁾解釈学的主体の条件であると言える。つまり、哲学的解釈学においては、「部分と全体の解釈学的循環は、必ずしもこのような危険な帰結に至るとは限らない。つまり、全体という概念そのものが相対的にのみ理解されるべきだからである。歴史や伝統のうちで理解に値する意味の全体とは、決して歴史の全体の意味ではない」³⁸⁾からである。

ガダマーにおいて哲学的解釈学は、まずもって存在論的な考究が前提となっているのであるが、その場合に重要な役割を果たすのは「言語」(Sprach)である。その言語は、ガダマーによって、解釈学的主体による理解という歴史性を伴った動態性を「地平の融合」という概念によって捉える場合に、「理解されうる存在は、言語である」³⁹⁾という命題として立ち現れてくるのである。しかし、ここにおいて用いられている言語とは、対象を指し示すための指示記号としての言語というものではなく、言語ゲームのような言語によって構成される社会的諸規則を織り込んだものであり、解釈学的主体にとって「理解の遂行形式としての言語性」⁴⁰⁾であると同時に「語と概念が本来のあり方に達する対話の運動」⁴¹⁾である。

以上のように定式化される哲学的解釈学において、解釈学的意識が問題とするのは同質性の継承にあるのではなく、異質なものの架橋にあると考えられる。また、そのような解釈学的問題をガダマーは以下のように定式化するのである。

まさにこの解釈学的問題の普遍性こそは、歴史にかかわるいっさいの利害(関心)の背後にまで問いを向けうるのである。なぜならば、この普遍性こそは、そのつどの「歴史的問い」なるものの底に潜んでいるものにかかわっているからである⁴²⁾。

・ガダマーによるハーバーマス批判

解釈学論争において、ハーバーマスの哲学的解釈学に対する論及に対してガダマーは「修辞学、解釈学、イデオロギー批判」という論文において批判を行っている。

議論の前提としてガダマーの哲学的解釈学は、既に述べたように普遍性を主張するので、社会科学の領域において論及の対象となることは、理論的性格上必然性をもって、ガダマーには受け止められ

ている。「解釈学の発端にある普遍性は、その発端が社会諸科学の論理としても考慮されなければならないということに合致する」⁴³⁾。

問題となるのはその内容であるが、最終的な問題の焦点は、ハーバーマスの批判が解釈学的主体の伝統への服従すなわちイデオロギー批判の不可能性に焦点があったことに対するガダマーの反批判となる。

ガダマーの考えに対してハーバーマスは、社会的な生活世界を構成するのは言語だけではなく、労働や支配からも構成されており、それらの要因によって系統的に歪曲されたコミュニケーションが形成され、その内部にいる解釈学的主体はそのような状況を意識化することができない点に、解釈学の限界を提示するのである。

しかし、ガダマーは解釈学的水準における問題をそのように把握しているハーバーマスは、解釈学を不当に縮小しているとみなすのである。

解釈学的意識によっては意識化されていないとされる支配や労働の領域に対してさえ、解釈学的意識は及ぶとガダマーは主張する。ガダマーにおいては、「言語はあらゆる社会的・歴史的な過程と行動の最後にいたって発見される無名の主体ではなく、つまり自己自身とその活動である客体化の全体をわれわれの視野に提示するような主体ではなく、われわれのすべてが共演するゲームである」⁴⁴⁾と考えられており、解釈学的主体がそのなかで活動する場合に、理解が為されたり、為されなかったりということはない。解釈学的主体とは絶えず、解釈し且つ適用をしながら存在しており、解釈学的な意識化の水準は諸地平の範囲においてすべてを意識化可能であるところに、その普遍性があるのである。故に、ハーバーマスの考えるコミュニケーション的水準におけるイデオロギー批判のみがその限界を提示し、労働と支配によって、系統的に歪曲されたコミュニケーションを判別できるのは、ある理論的な極限状態においてか、さもなければ、理論的に解釈学的次元を縮小している場合に成立するとガダマーは主張している。

もし了解的な意味の領域（文化的伝承）がただ実質的要因として、認識しうる社会的現実である他の決定要因から区画されているというのであれば、それは解釈学的な次元での普遍性を切り詰めることである。すべてのイデオロギーは、必ずしも誤った言語意識として、ただ単に了解的な意味としてのみ考えられるごときものではなくして、まさにその真の意味においても、例えば支配関心という意味においても理解されうるのである⁴⁵⁾。

そして、ガダマーはハーバーマスの見解に対して、「われわれがいつわりを見抜いて誤った思いあがりやを暴くときにのみ、われわれは理解するという意味なのか。ハーバーマスはこれを前提しているようである。少なくとも、彼にとっては反省の力が活動することによってのみ、その力は証明されるようである」⁴⁶⁾と述べ、コミュニケーション的水準における理解というものが、少なくとも解釈学が視野に入れている理解とは異なる構成を有していることを指摘する。つまり、ハーバーマスは理論化に

あたって、解釈学的次元をコミュニケーション的次元の一部を構成する限界事例として捉えようとしているが、実際には、ガダマーにおいては全く逆であり、解釈学的次元はコミュニケーション的次元に先行していつも存在していると考えられている。「ハーバーマスが、あらゆる人間理解と行為につきものの先行理解と本質的な先入見の制約の分析に従うとき、彼が解釈学的な反省に課している要求は、やはり、根本的に別の要求である」⁴⁷⁾。

また、イデオロギー批判が不可能となる状況の原因としてハーバーマスは伝統に対する主体の埋没を指摘するのだが、ガダマーにとってはこれも哲学的解釈学を狭小化することによって成立していると考えられている。

ガダマーにおいて、伝統という文化的伝承が可能となる根拠はそれに権威があり且つそれを承認するからであり、解釈学的主体が無批判にそれを受け容れることを前提としているのではない。「文化的伝承を絶対化するというのは、私はまちがいだと思う。それは理解されるすべてのものを理解しようとするというだけの意味である」⁴⁸⁾。

ガダマーは、現実的に成立している権威関係を自分が認めることを前提として、権威と権力は別の水準にあると考えている。現実的に権威が諸個人へ影響を及ぼすことは事実であるとして、そこに成立している秩序は権威に基づいているのであり、全面的な権力への依存とは考えられない。つまり、イデオロギー批判という方法によって、権威関係を告発することが全面的に正当化されるとするならば、社会秩序はいかなる根拠によって成立するかを示す必要がある。そしてさらに、権力の介在によって成立する権威関係は特殊事例であり、ガダマーの考える真なる権威関係とは、社会秩序を構成する主体的な自由選択によって成立するものとして捉えられている。「問題は、ただこうした[権威に対する - 筆者註]承認が何にもとづいているかということにあるだろう。確かにこうした承認は、しばしば権力に対して無力なるもの事実上の弱さを表現することもありうるが、しかしそれは何も本当の服従ではないし、権威にもとづくものでもない。中略 権威が支配するのは、それが『自由に』承認されるからである。権威に耳を傾けることは盲目的服従ではない」⁴⁹⁾。

さらにイデオロギー批判という方法は、ガダマーにとって懐疑的な方法である。「問題は、事実的に妥当するものを他の可能性に対決させるという意識化の側面に、反省の機能を固定するかどうかである」⁵⁰⁾とガダマーは述べることにより、ハーバーマスが理論化している意識化の側面は限定的であると同時に、事実として成立するものへの対決という姿勢はいつも必ず妥当するとは考え難い。また、事実として成立している事柄は、言語化によって我々の意識へも介入してきており、それをも含めた意識化が我々の理解においては進行していると考えの方が、解釈学的状況においても人間の精神作用においても妥当するとガダマーはハーバーマスを批判する。

近代の学問の実用的な使用が、われわれの世界と同時にわれわれの言語をも徹底的に変革しているということ、だれも否定しないであろう。しかしまさに「われわれの言語をも」である。このことはいかなる仕方に

おいても、ハーバースは私のせいだと思い違えているようだが、言語的に分節化された意識が、生活実践の物質的な存在を規定するということの意味するのではなく、ただどのような社会的な現実的強制があっても、それなりに再度言語的に分節化された意識によって説明されないような社会的現実が存在しないということである⁵¹⁾。

またイデオロギー批判が成立するとして、その根拠は何処に求められるかとガダマーは問う。ガダマーによれば、ハーバースは精神分析における治療を社会病理におけるイデオロギー批判とパラレルに考え、その矯正効果を示すことによって、イデオロギー批判の可能性を示唆するのであるが、精神分析においても、イデオロギー批判においても治療という行為が成立するのは、社会的文脈においてそれが容認されている場面において、すなわち「治療」という脈絡のなかで成立するのであり、それが社会的脈絡に対して特権的に自己の立場を主張することはできない。つまり、治療という社会的合意を前提としなければ、両者はともに成立しないのである。「われわれは、社会的共同体があらゆる緊張や障害にさいしてもつねにふたたび社会的な同意に、つまりそれによって共同体が存立する社会的な同意へと連れ戻される、ということを教えられるのである」⁵²⁾。

最終的にガダマーは、ハーバースのイデオロギー批判に関して、権威と暴力行為としての権力を混同し、秩序に対する告発を特権的に認めるというその姿勢自体を問題として、以下のようにハーバースの態度を位置づけるのである。

原理的に解放を目指す意識は、あらゆる支配強制の解消ということを念頭におかねばならないということが不可避的な帰結であるようにみえる。そしてこのことは無政府主義的なユートピアがその最後の理想像であるにちがいないということの意味するであろう⁵³⁾。

・おわりに

以上のように、「解釈学論争」の一部を成すハーバースの解釈学批判とガダマーの哲学的解釈学およびハーバースへの反批判を見てきたのであるが、フランスのリクール (Paul RICŒUR) は両者の争点を次の4点に要約している。

- (1) ガダマーはロマン主義哲学から予断の概念を借用し、それを先行理解というハイデガーの概念によって再解釈したのに対し、ハーバースはルカーチやフランクフルト学派 (ホルクハイマー、アドルノ、マルクーゼ、K・O・アペルら) によって再解釈された、マルクス主義から出てくる利害関心の概念を発展させた。
- (2) ガダマーは歴史的現在における文化的伝統の再解釈として理解された精神科学に立脚するのにに対し、ハーバースは制度的物象化に直接対抗する批判的社会科学に依拠する。

(3) ガダマーは了解に内在する障害としての誤解を導入するのに対し、ハーバーマスは暴力が偽装した効力によってコミュニケーションを組織的に歪曲するというイデオロギー理論を展開する。

(4) ガダマーは「われわれは対話である」という存在論に解釈学の課題を設定するのに対し、ハーバーマスはわれわれに先行するというより、未来からわれわれを導く、制限も拘束もないコミュニケーションという規制理念を援用する⁵⁴⁾。

このリクルールによる指摘は、ハーバーマスとガダマーの立場の相異を端的に明確化していることで評価できるが、両者を哲学的な立場の違いとして把握しているため、ハーバーマスの社会的行為を理解社会学によって基礎づけるという方法論的観点が現れてこない。

ハーバーマスが社会的行為に関する社会学的水準で理論化を行うのに対して、ガダマーは存在論的な水準において理論を展開している。この点は、前提として決定的な相異であるが、ハーバーマスによる社会的行為に関する理論への解釈学的アプローチの援用という企図から考察するならば、社会的世界における或る行為者をめぐる環境として、論及することが可能となる。

ハーバーマスは、言語論的アプローチにおいて後期ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論によって理解社会学を基礎づけるには、そのメタ理論の導入と没時間性が問題となると考えた。よって、それを克服するためにガダマーの哲学的解釈学における翻訳をモデルとした日常言語による異なる言語ゲーム間の調整と影響作用史による地平の融合による時間性の獲得を企図したのであった。つまり、主体が捉える言語ゲームという概念を、主体の理解する範囲としての地平として捉え直すことによって、それを克服可能であると考えたのである。

しかし、ハーバーマスは哲学的解釈学における地平の融合という概念を文化的伝承の積極的受容として解釈した。少なくとも、先入見や影響作用史の概念は伝統を積極的に評価することを前提としていたと考えたのである。ここにコミュニケーションの水準においては、解放的な関心が重要な位置を占めると考えるハーバーマスが受け入れがたい要素があったのである。そこで、主体の反省力を梃子としてイデオロギー批判という方法を導入するのである。

これは一方でガダマーの哲学的解釈学との関連において、ガダマーが伝統を受容するというのは、存在論的に規範的な要請や事実として成立している制度などすべての脈絡において理解を行う解釈学的主体はそれらを受容しているのであり、先行理解は不可避免的にそのような状況を作り出しているのである。更に言えば、イデオロギー批判は、イデオロギー批判という脈絡において解釈学的主体および彼らが構成する共同体に受容されている限りにおいて、イデオロギー批判たりえるのである。

他方で、イデオロギー批判が特権的に成立するとすれば、ハーバーマスは別の陥穽に陥ることとなる。ハーバーマスは、言語論的アプローチのメタ言語若しくはメタ理論の導入が無限遡行に陥ることを回避するために、解釈学的アプローチを用いたにもかかわらず、社会的な生活世界におけるシステム的に歪曲されたコミュニケーションを反省するイデオロギー批判が特権的に与えられるとすれば、そ

の特権性を担保する根拠が必要となる。これは同時に無限遡行を導入する契機となることがないどのように保証するのか。

これらふたつの点に関して、この段階でのハーバーマスは、規範科学や機能主義に陥ることのない社会的行為の十全な理論化の方途が明瞭になっていなかったと考えられる。故に、『コミュニケーション的行為の理論』を世に問うて後に出版された『社会科学の論理によせて』の新版においてハーバーマスは「コミュニケーション的行為の理論を方法論の視角から導入しようとした試みが袋小路に陥ってから、私はこの考えにこだわるのをやめた」⁵⁵⁾と述べる契機のひとつがここにあると考えられる。

註

- 1) Habermas, J. *Theorie des kommunikativen Handelns*, Band 1, Suhrkamp, 1981. S. 7 (河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論(上)』未来社、1985年、15ページ)。
- 2) Habermas, J. *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, Suhrkamp, 1970/1982 (Neuausgabe). S. 144. (清水多吉ほか訳『社会科学の論理によせて』国文社、1991年、90ページ)。
- 3) *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1958, p.88. (藤本隆志訳『哲学探究』ウイトゲンシュタイン全集8、大修館書店、1976年、176ページ)。
- 4) 豊泉周治氏が指摘するように、ハーバーマスにおいては「言語論的転回」と「コミュニケーション論的転回」は異なる水準にあると考えることが妥当である。それというのも、ハーバーマスにおいては「言語論的転回」は未だ主観哲学の領域に属するものであり、ハーバーマスが積極的に理論化を試みているコミュニケーション的行為の水準において、それは重要な契機をなすものの、一致するものではないからである。(豊泉周治『ハーバーマスの社会理論』世界思想社、2000年、16ページ以下参照)。
- 5) Habermas, J. 1970/1982, a.a.O., S. 272. (邦訳 268ページ)。
- 6) ebd., S. 272. (邦訳 269ページ)。
- 7) ebd., S. 272. (邦訳 269ページ)。
- 8) ebd., S. 278. (邦訳 277ページ)。
- 9) ebd., S. 279. (邦訳 278ページ)。
- 10) ebd., S. 279. (邦訳 278ページ)。
- 11) ebd., S. 281. (邦訳 281ページ)。
- 12) ebd., S. 281. (邦訳 281ページ)。
- 13) ebd., S. 283. (邦訳 284-5ページ)。
- 14) ebd., S. 284. (邦訳 285ページ)。
- 15) ebd., S. 284. (邦訳 286ページ)。
- 16) ebd., S. 300. (邦訳 307ページ)。
- 17) ebd., S. 303. (邦訳 312ページ)。
- 18) ebd., S. 305. (邦訳 313ページ)。
- 19) ebd., S. 303. (邦訳 311ページ)。
- 20) ebd., S. 303. (邦訳 314ページ)。
- 21) ebd., S. 307. (邦訳 317ページ)。
- 22) ebd., S. 307f. (邦訳 318ページ)。
- 23) Habermas, J. 'Der Universalitätsanspruch der Hermeneutik' in *Hermeneutik und Dialektik*, Vol. 1 Tübingen 1970, 参照。
- 24) Habermas, J. 1970/1982, a.a.O., S. 309. (邦訳 320ページ)。
- 25) Gadamer, H-G., *Wahrheit und methode. Grundzüge einer philosophischen hermeneutic*. 4. Auflage 1975 J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen. S. XX. (饗田収ほか訳『真理と方法』法政大学出版局、1986

- 年、xx ページ》
- 26) ebd., S. XX . (邦訳 xx ページ)》
- 27) ebd., S. X . (邦訳 x ページ)》
- 28) ebd., S. XX . (邦訳 xx ページ)》
- 29) ebd., S. X . (邦訳 x ページ)》
- 30) ebd., S. X . (邦訳 x ページ)》
- 31) ebd., S. X . (邦訳 x ページ)》
- 32) ebd., S. X . (邦訳 x ページ)》
- 33) ebd., S. XX. (邦訳 x ページ)》
- 34) ebd., S. X . (邦訳 x ページ)》
- 35) ebd., S. XX . (邦訳 x ページ)》
- 36) ebd., S. XX . (邦訳 x ページ)》
- 37) ebd., S. XX . (邦訳 xx ページ)》
- 38) ebd., S. XX . (邦訳 xx ページ)》
- 39) ebd., S. XX . (邦訳 xx ページ)》
- 40) ebd., S. XX . (邦訳 x ページ)》
- 41) ebd., S. XX . (邦訳 xx ページ)》
- 42) ebd., S. XX. (邦訳 x ページ)》
- 43) Gadamer, H-G., 'Rhetorik, Hermeneutik und Ideologiekritik' in *Kleine Schriften* , *Philosophie Hermeneutik. 2., unveränderte Auflage, 1976 S. 119.* J.C.B. Mohr(Paul Siebeck) Tübingen.(斎藤博訳「修辞学、解釈学、イデオロギー批判 『真理と方法』に対する批判に導かれた研究」:『哲学・芸術・言語 真理と方法のための小論集』未来社、1977年所収、98ページ)》
- 44) ebd., S. 123. (邦訳 105ページ)》
- 45) ebd., S. 122. (邦訳 104ページ)》
- 46) ebd., S. 123. (邦訳 105ページ)》
- 47) ebd., S. 120. (邦訳 100ページ)》
- 48) ebd., S. 123. (邦訳 104ページ)》
- 49) ebd., S. 124. (邦訳 106-7ページ)》
- 50) ebd., S. 125. (邦訳 107ページ)》
- 51) ebd., S. 125. (邦訳 109ページ)》
- 52) ebd., S. 129. (邦訳 115ページ)》
- 53) ebd., S. 130. (邦訳 115ページ)》
- 54) ポール・リクール『解釈の革新』白水社、1978年、313ページ。
- 55) Habermas, J. 1970/1982, a.a.O., S. 10. (邦訳 8ページ)》